

観光地づくりの新たな視座・視点

——特集テーマに学ぶ理論と実践

公益財団法人日本交通公社 研究調査部長 梅川 智也

「観光地づくり3.0」の時代

わが国の観光地づくりは、旅館、土産品など自らの事業体の経営、発展や業界の利益を最大化しようという「観光地づくり1.0」の時代から、観光に関連する複数の業界が連携し、行政も巻き込みながら観光振興を図る2.0の時代を経て、今や住民を含むさまざまな主体が共通のビジョンのもとで協働し、自ら考え、行動し、自立していく「観光地づくり3.0」の時代を迎えている(注)。

観光地づくりを支援するわれわれの業務も、戦後しばらくの間行われていた観光診断の時代から地域の観光計画策定支援の時代を経て、どうビジョンを実現させていくか……、合意形成とともに実現化の経験、ノウハウが問われる時代を迎えている。つまり、われわれ自身も「観光地づくり3.0」の時代に対応した知見と能力、そして不断の努力がなければ、鼎の軽重が問われる時代となっている。

観光地づくりの本質とは……

■「観光はまちづくりの総仕上げ」は観光地づくりの理念

本号の特集1で、当財団の調査研究分野を五十年以上にわたりご指導いただいている鈴木忠義氏(東京工業大学名誉教授)が言い続けておられる「観光はまちづくりの総仕上げ」という考え方は、観光地づくりの理論であり、まさに理念である。つまり地域を磨き上げる「まちづくり」を疎かにし、目先の商売を優先するあまり、誘客やプロモーションばかり傾注してきた観光地に対する問題提起でもある。

観光地づくりは、訪れたい、暮らしてみたい、あこがれの地域、あるいは、また来たいと思わせる魅力ある地域をどうやって創り上げるかである。まちづくりの結果が観光に結びつき、地域の産業が潤うという幸せの好循環が地域のなかでどう創り上げられるかであるが、こうした真つ当な考え方が近年忘れられつつあるのではないか。

多様な目的を持った旅行者を受け入れるのが「観光地」であるが、狭義の観光目的だけではなく、きており、必ずしも旅行者の目的が達成できなくなってきたところに既存観光地の低迷理由があるのではないだろうか。既存の観光地について旅行者は、「観光地化していることに対する安心感(一定のサービスが受けられる)」と同時に、「観光地化した地域に対する嫌悪感(均一化されたサービスしか受けられない)」も感じており、観光地化することの是非を「人間の本来」という原点に立ち返って再確認する必要がある。

2 地域の「心」である 遺伝子をつなぐ

今号の巻頭言をお願いした倉敷、そして特集2〜4で取り上げた田布施、草津、阿寒湖。それぞれが国を代表する都市観光地、温泉観光地であるが、いずれの地域にも、住民誰もが共有できる分かりやすいビジョンが存在していることに気がつく。

天領・倉敷は、高梁川流域で取れた年貢米などの一大集積地(内陸

港)として発展したが、現在の美観地区に並ぶ蔵は当時の商人らによって建てられたものである。倉敷の実業家、社会事業家大原孫三郎の長男として生まれ、ドイツ視察の経験を持つ大原総一郎は、一九三八年(昭和十三年)ローテンブルクを参考として倉敷の「街並み保存」という概念(ローテンブルク構想)を打ち出した。その遺伝子が語り継がれ、戦後の近代化一色の時代に「倉敷都市美協会」が結成され、全国の街並み保存運動へと発展していく、その先駆けとなったのが倉敷である。

由布院温泉は、古くは別府十湯の一つであったが、行政界の変更によって外され、奥別府といわれていた。別府温泉近代化の祖・油屋熊八が亀の井ホテルの別荘として金隣湖に隣接して建てたのが亀の井別荘である。その油屋らが招聘したのがドイツ留学から帰国した東京大学の本多静六博士であった。一九二四年、町主催の『由布院温泉発展策』という講演を行い、保養滞在型の温泉地を目指すというビジョンが町民に示された。その講演の内容は小学生の教科書の

副読本として印刷され、今でも地元の子供たちに読み継がれている。

草津温泉の歴史は神話の時代にまでさかのぼるらしいが、一八八〇年、ドイツのベルツ博士により『日本鉱泉論』が発刊、草津の名と欧州では湧出しない強酸性の泉質の素晴らしさが世界に伝えられた。自らも温泉研究所と療養所を建設するために土地を購入したが、その計画は実現しなかった。しかし、「ベルツマインド」といわれるように草津を温泉療養と高原リゾートとして発展させる方向性を示し、それが住民にも理解浸透していった。

阿寒湖温泉は、フランス留学経験を持つ前田正名が遺した広大な土地と森林を、次男の正次、その妻の光子が継承し、前田一歩園を財団法人化して、阿寒湖周辺の自然を永続的に後世に伝え、観光地として発展させることの重要性を地域住民に伝えた。こうした地域の方向性やビジョンに関する遺伝子の存在こそが、地域の「心」といふべきものである。そうした素晴らしい遺伝子がありながら、上記観光地でも少しづつ忘れ去

られようとしていることが気がかりである。

③「時間」と「空間」のデザイン——求められるハードとソフトのバランス

観光地としては、何を目的に人に来てくれるのか、あるいは来てもらうためには何をどうすればいいのかを追求すること、これが観光地づくりの要諦である。つまり、旅行者を取り巻く「空間」、すなわちハードと旅行者が持つ「時間」、すなわちソフトとをどうデザインして提供するかが観光地づくりということになる。

近年、ハードとソフトのバランスは明らかに崩れている。一九五〇年代後半から一九八〇年代後半の約三十年間続いた「ハード」中心の時代から、バブルが崩壊した一九九〇年代前半から現在に至る「ソフト」重視の約二十年間を経て、ようやく振れすぎていた振り子の針が戻るようになっている。この二十年間で「舞台」としての観光地は、都市に比べて空間の劣化が激しく、豊かさを感じさせない状況に陥っている。

人が離合集散する観光地は、美しくなければならぬ。混沌としたアジア的な生活空間も魅力的ではあるが、いざというとき(例えばサミット開催など)、風格のある観光地やリゾートの存在は、そこに住む国民の民度に深く関わる。一定の規律やルールに基づいた自律した美しい観光地づくりが全国で実践されることこそが、国際競争力の強化につながる。

これからは、ハードかソフトかという二者択一的な政策ではなく、両者は車の両輪であり、両者がそろって初めて生きていくというこの二十年間の教訓から「バランス」を大切にしなければならない。

特集で取り上げた由布院温泉では湯の坪街道の電柱地中化など景観整備が進められ、草津温泉では積年の課題であった「湯畑」周辺の整備が進められている。そして阿寒湖温泉では湖畔公園の整備が進むきっかけとしてあるホテル跡地の活用が検討されている。このように、緊縮財政のなかで予算がないからと「空間」のデザインから逃げない姿勢が、

視座

観光地の高質化に寄与することとなる。

特集テーマからの

これからの観光地づくりに向けて——特集に学ぶ

今回の特集で取り上げた観光地のように「長く生き

続ける観光地」にこそ、観光地づくりの本質があると考えられる。そこには、鈴木氏が指摘する人間の本質である「喜び」と「生きがい」の追求が底辺に流れており、由布院、草津、そして阿寒湖においても真摯に「人間の本质」に向き合い続けてきた。まちや地域にはそれぞれ特色があり、個性があり、それを伸ばそうというのが観光である。普遍的なセオリーが使える部分もあろうが、深い部分は決して一般化、共通化できない。それほど地域は浅薄ではなく、まちづくりや地域づくりの「マニユアル」には載っていない「何か」があるのが地域である。それは卓越した人材であったり、誰も知らない優

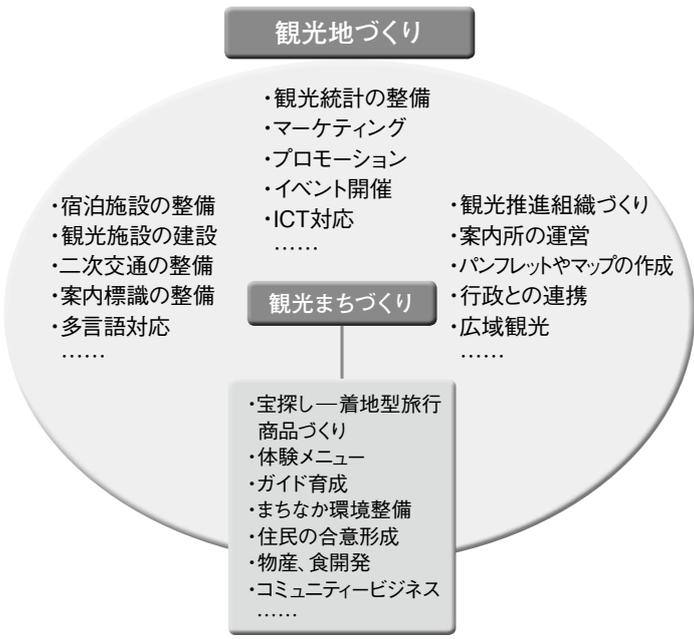
れた地域資源であったり、歴史と伝統に裏付けられた文化や作法であったり……。その意味で「地域に入るとき作法」を常にわれわれは意識してきた。そして、日々の営みのなかに地域が脈々と紡いできた「遣伝子」の存在を垣間見るのである。

観光地づくりは、地域の将来目標（どういう「まち」にしたいか）を住民が共有し、語り継ぐこと、そして地域の遣伝子を明確なイメージとして認識することが、地域の「心」となり、理念となる。そしてこれからは、そうした遣伝子を人から人へとつないでいく知恵が求められる。われわれの役割は、地域の遣伝子を探り出し、その「心」を具体的な理念として「形」にして表現し、少しでも実現に向けた手助けをして差し上げることでありと理解している。

（つめかわ ともや）

（注）観光地づくり30：観光分野のこうした段階発展論に学術的な定義はなく、あくまで分かりやすくするための筆者の個人的見解。技術やノウハウの進展を示す表現方法の一つであり、ダニエル・ピンクの『モチベーション30』やティム・オライリーらによる『Web 2.0』などが有名。組織論や音楽理論などでも応用されている。

<観光地づくりと観光まちづくりの関係>



「観光地づくり」と「観光まちづくり」

どちらも学術的に定説があるわけではない。「観光地づくり」はかつてのハード中心の観光地開発、観光地整備に続くソフトも含めた概念として使われてきたが、「観光まちづくり」は二〇〇〇年頃から都市計画の分野で使われ始め、一時は国の事業としても位置づけられた。まちづくりから観光に向かうタイプと観光からまちづくりに向かうタイプの二つがあるといわれている。特に後者が本号で対象とした「観光地におけるまちづくり」で、近年のハードからソフト重視の時代のなかで全国の観光地で盛んに実践された。

*「観光まちづくり」を「観光地におけるまちづくり」とした場合の関係性
 (注)「観光まちづくり」には地域住民の参画が必須
 出典：「観光まちづくりはどこに向かうのか」梅川智也：『都市計画 No.295』
 公益財団法人日本都市計画学会（2012年2月）

倉敷・由布院温泉・草津温泉・阿寒湖温泉の観光地づくりの主な経緯

	倉敷	由布院温泉	草津温泉	阿寒湖温泉
戦前	<ul style="list-style-type: none"> 1930年(昭和5年)大原孫三郎により大原美術館設立(日本最初の西洋美術中心の私立美術館) 1938年(昭和13年)11月大原総一郎氏帰朝第一声「倉敷を日本のローテンブルクに!」(ローテンブルク構想) 	<ul style="list-style-type: none"> 1924年(大正13年)10月11日 本多静六博士による「由布院温泉発展策」講演 1925(大正14年)由布院～別府間に亀の井バスが運行開始 1925(大正14年)大湯線(現久大線)南由布駅～北由布駅(現由布院駅)間開通 	<ul style="list-style-type: none"> 1878年(明治11年)ベルツ博士、初めて草津を訪れる 1880年(明治13年)ベルツ博士「日本鉱泉論」発刊 1896年(明治29年)草津の時間湯に関する『熱水浴療論』(ベルツ)発刊 1913年(大正2年)内堀利次によりスキー伝来 1914年(大正3年)スキークラブ開設 1919年(大正8年)「草津町温泉使用条例」制定 1926年(大正15年)軽井沢～草津間 草軽電鉄全線開通 	<ul style="list-style-type: none"> 1858年(安政5年)松浦武四郎が阿寒を探検 1897年(明治30年)マリモ発見 1899年(明治32年)前田正名が釧路・天寧に前田製紙合資会社設立 1906年(明治39年)前田正名が阿寒湖畔の開発に着手 1910年(明治43年)正名、「前田家の財産は全て公共事業の財産とす」家憲を立てる 1921年(大正10年)前田正名逝去 1934年(昭和9年)阿寒湖・摩周湖・屈斜路湖を含む地域(約9万ha)阿寒国立公園に指定
昭和20年	<ul style="list-style-type: none"> 1948年(昭和23年)倉敷民芸館開館 1949年(昭和24年)倉敷都市美術協会設立(民芸運動が端緒) 1950年(昭和25年)倉敷考古館開館 1968年(昭和43年)倉敷市伝統美観保存委員会設立 1969年(昭和44年)上記条例による保存計画により、倉敷川畔美観地区・同特別美観地区・保存家屋ならびに保存記念物指定 1973年(昭和48年)倉敷紡績の工場を改修して、観光施設アイビスクエアとして再生 1978年(昭和53年)文化財保護法に基づく「倉敷市伝統的建造物群保存地区保存条例」を制定 1979年(昭和54年)都市計画法に基づく「倉敷市伝統的建造物群保存地区」の区域決定 1981年(昭和56年)大原美術館・川島虎次郎記念館完成 1988年(昭和63年)瀬戸大橋完成・JR瀬戸大橋線開業 	<ul style="list-style-type: none"> 1952年(昭和27年)由布院盆地ダム建設計画発表 1955年(昭和30年)湯平村と由布院町が合併して湯布院町に 1959年(昭和34年)国民保養温泉地指定 1970年(昭和45年)8月猪の瀬戸湿原ゴルフ場建設計画発表、「由布院の自然を守る会」準備会発足 1970年(昭和45年)12月町造り雑誌「花水樹」創刊(「由布院の自然を守る会」準備会の機関誌) 1971年(昭和46年)3月「由布院の自然を守る会」から「明日の由布院を考える会」へと改組 1971年(昭和46年)欧州研修旅行を経て最初の観光まちづくりの哲学「由布院は大きくなることを追いかけることをやめて、小さいままの豊かさを追いかけてよ。主役は地域である。」が提唱される。「クアオルト構想」の発芽 1975年(昭和50年)4月大分県中部地震発生 1975年(昭和50年)7月辻馬車運行開始、8月第1回ゆふいん音楽祭、10月第1回牛喰い絶叫大会開催 1976年(昭和51年)第1回湯布院映画祭開催 1981年(昭和56年)国民保養温泉地指定 1982年(昭和57年)百日シンポジウム開催 1986年(昭和61年)クアオルト構想推進委員会答申提出 	<ul style="list-style-type: none"> 1948年(昭和23年)日本で最初の邦人用スキーリフト架設 1949年(昭和24年)上信越高原国立公園指定 1950年(昭和25年)草津観光協会設立 1960年(昭和35年)白根火山ロープウェイ完成 1960年(昭和35年)湯もみショー開始 1962年(昭和37年)「草津高原開発計画」発表 1964年(昭和39年)「草津町温泉使用条例」制定 1966年(昭和41年)バスターミナル開業 1968年(昭和43年)「草津観光開発基本計画」発表 1972年(昭和47年)「草津町再開発計画」(岡本太郎による)これに基づき、1974年(昭和49年)湯畑改造 1974年(昭和49年)万代鉱温泉給湯開始 1976年(昭和51年)「草津町社会開発計画」発表 1979年(昭和54年)草津町民憲章「歩み入る者にやすらぎを、去りゆく人にしあわせを」制定 1980年(昭和55年)草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバル開始 1983年(昭和58年)町営・大湯乃湯開業 1984年(昭和59年)和風村開業 1989年(昭和63年)「群馬リフレッシュ高原リゾート構想」の13の重点整備地区の一つに指定されリゾート開発が進む(音楽の森スキー場、温泉資料館完成) 	<ul style="list-style-type: none"> 1949年(昭和24年)阿寒観光協会設立 1950年(昭和25年)第1回まりも祭り開催 1951年(昭和26年)足寄～阿寒湖畔間に定期バス運行開始 1952年(昭和27年)マリモ特別天然記念物に指定 1954年(昭和29年)株式会社前田一歩園製材所設立 1954年(昭和29年)阿寒遊覧船株式会社設立 1956年(昭和31年)第1回阿寒スピードスケート大会開催 1961年(昭和36年)チュウレイ島にマリモ観覧施設開設 1963年(昭和38年)阿寒湖畔スキー場開設 1965年(昭和40年)阿寒湖畔バスセンター設置 1968年(昭和43年)阿寒湖畔ビジターセンター開館 1971年(昭和46年)第1回阿寒湖水上まつり開催 1977年(昭和52年)阿寒湖畔新野営場開設 1978年(昭和53年)チュウレイ島にマリモ展示観察センター開設 1979年(昭和54年)第1回阿寒湖水上フェスティバル開催 1983年(昭和58年)財団法人前田一歩園財団設立 1983年(昭和58年)「阿寒の母」前田光子逝去 1984年(昭和59年)阿寒湖ビジターセンター新装開設 1986年(昭和61年)阿寒湖畔特定環境保全公共下水道完成
平成	<ul style="list-style-type: none"> 1991年(平成3年)大原美術館本館増設 1997年(平成9年)倉敷チボリ公園開園 2002年(平成14年)「倉敷屏風祭」が復活開催 2004年(平成16年)「倉敷市観光振興アクションプラン 観光都市「くらしき」の復活を目指して!～滞在型観光推進に向けた感動体験のまち「くらしき」づくり」策定 2005年(平成17年)「地産地消」がテーマのくらしき朝市「三斎市」開始 2005年(平成17年)美観地区夜間景観照明事業を3カ年計画で実施 2008年(平成20年)倉敷チボリ公園開園 2008年(平成20年)倉敷まちづくり株式会社設立(倉敷市・倉敷商工会議所・地元金融機関等が出資) 2009年(平成21年)倉敷物語館開館 2010年(平成22年)倉敷市中心市街地活性化基本計画「世界に誇る伝統文化 居心地のよいまち くらしき」内閣府認定 2011年(平成23年)チボリ公園跡地に倉敷みらい公園・三井アウトレットパーク倉敷・アリオ倉敷開業 2012年(平成24年)美観地区に「林源一郎商店・倉敷生活デザインマーケット」開業(倉敷まちづくり株式会社) 	<ul style="list-style-type: none"> 1989年(平成元年)特急「ゆふいんの森」号運行開始 1990年(平成2年)由布院駅舎完成(磯崎新設計) 1990年(平成2年)由布院観光総合事務所発足 1990年(平成2年)「市場(バザール)のある温泉リゾート村構想」発表 1990年(平成2年)「潤いのある町づくり条例」制定 1990年(平成2年)「健康温泉館クアージュゆふいん」開館 1996年(平成8年)「由布院温泉観光基本計画」発表 1998年(平成10年)ゆふいん料理研究会発足 2000年(平成12年)3月「ゆふいん」建築・環境デザインガイドブック『ムラ』の風景をつくる』作成 2002年(平成14年)湯布院・いやしの里の歩いて楽しいまちづくり交通実験の実施 2005年(平成17年)10月狭間町・庄内町・湯布院町が合併し、由布市発足 2006年(平成18年)「観光環境容量・産業連関分析調査及び地域由来型観光モデル事業」実施 2008年(平成20年)由布市景観条例施行 2011年(平成23年)由布市観光基本計画策定「由布市・観光発展策～懐かしき未来」の創造 	<ul style="list-style-type: none"> 1992年(平成2年)シズカ山スキー場完成 1990年(平成4年)「リゾートマンション建設凍結」を宣言 1993年(平成5年)「草津町景観条例」制定 1996年(平成8年)草津温泉女将会湯の華会設立 1997年(平成9年)～1999年(平成11年)観光協会・旅館協同組合が中心となり「草津温泉ブラッシュアップ計画策定調査」「古さと新しさを兼ね備えた新湯治場」 2000年(平成12年)ベルツ記念館開館 2001年(平成13年)「草津の冬を考える会」発足 2001年(平成13年)「草津温泉 泉質主義宣言」 2002年(平成14年)「草津温泉歩きたくなる観光地づくり基本計画」策定 2003年(平成15年)～「草津温泉歩きたくなる観光地づくり社会実験」実施 2004年(平成16年)「草津町温泉使用条例」最終改正 2007年(平成19年)「草津町観光立町推進基本条例」制定 2008年(平成20年)～2010年(平成22年)「新草津温泉ブラッシュアップ事業」実施 2009年(平成21年)「草津観光立町基本計画」策定 2009年(平成21年)景観行政団体に移行、「いで湯の里草津」景観プロジェクトスタートアップ事業開始 2010年(平成22年)「迷い車プロジェクト」(カーナビ調査)実施 2011年(平成23年)4月18日草津町観光安全宣言 2012年(平成24年)湯畑周辺の再整備着工(「御座の湯」新築、2013年度「湯路広場」、2014年度湯もみショー会場「熱の湯」新築の予定) 	<ul style="list-style-type: none"> 2000年(平成12年)阿寒湖観光協会 財団法人日本交通公社と共同で長期計画「阿寒湖温泉活性化基本計画」(通称 再生プラン2010)着手 2000年(平成12年)～2001年(平成13年)度「再生プラン 2010」策定 2001年(平成13年)6月「阿寒湖温泉まちづくり協議会」設立 2001年(平成13年)7月カナダ(バンフ、ジャスパー)国立公園視察 2001年(平成13年)11月女性だけのまちづくりの会「まりも倶楽部」設立 2002年(平成14年)「阿寒湖温泉再生プラン2010」策定 2002年(平成14年)阿寒湖畔エコミュージアムセンター完成 2005年(平成17年)1月「阿寒観光協会」と「阿寒湖温泉まちづくり協議会」が統合され「阿寒観光協会まちづくり推進機構」設立 2005年(平成17年)7月「特定非営利活動法人阿寒観光協会まちづくり推進機構」設立 2005年(平成17年)10月釧路市・阿寒町・音別町が合併し、新「釧路市」発足 2007年(平成19年)「特定非営利活動法人阿寒観光協会まちづくり推進機構」役員改選、組織改編 2008年(平成20年)阿寒湖まりも館開館 2011年(平成23年)「阿寒湖温泉・創生計画2020」開始 2012年(平成24年)「阿寒湖温泉アイヌシアターイコロ」開館

出典：各種資料から公益財団法人日本交通公社作成